

N K H

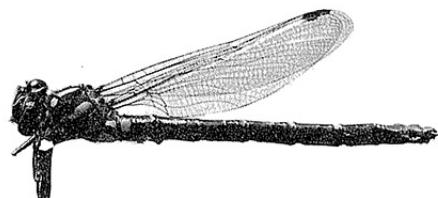
長岡市立科学博物館報

No. 57 1990

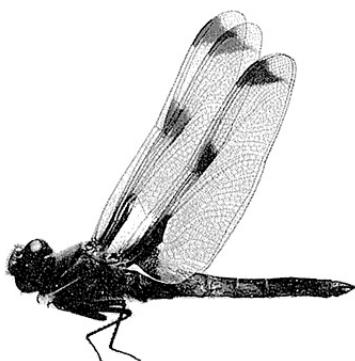


N K H

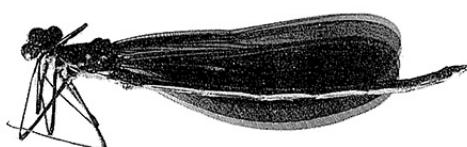
57号



▲ムカントンボ



▲ベッコウトンボ



▲アオハダトンボ

## 特集：長岡の昆虫

山屋茂人

1990年3月

### 〈はじめに〉

長岡市の昆虫相については、長岡市立科学博物館が主催する「昆虫相を調べる会」による報告（N K H、No.37、1980；No.45、1984；など）があり、周辺他地域に比べ著しく解明されている。これらの報告は、新潟県低山帯の昆虫相を論ずる際の資料としてだけではなく、環境問題や自然保護などの今日的な問題にとっても重要な資料となっている。

さらに、昨年、長岡市の昆虫に関して次の2冊の普及書が刊行され、長岡の昆虫はより親しみやすいものとなった。1つは「長岡の自然・昆虫編」（長岡市教育委員会）で、チョウとトンボを主に扱い、生態写真を中心にして長岡の昆虫を概説したものであり、他の1冊は長岡市史双書のなかの「長岡の動植物」（長岡市）に見られる。これは長岡の昆虫相に関する近年の変遷を述べたものであるが、分布上興味深い種や地理的の変異についても触れている。

このように、長岡の昆虫相の解明は一部の分類群については進展しているが、残された課題も多い。この小文では、新たに得られた知見を分類群ごとに紹介するとともに、博物館に問合せの多い種について簡単な解説を行いたい。

本稿の作成にあたり、「昆虫相を調べる会」に参加された会員諸兄並びに講師として同会の指導にあたられた樋熊清治先生（十日町市）には、重要な情報を提供いただいた。厚くお礼申し上げる。

〈表紙の写真〉

亀崎で行われた「昆虫相を調べる会」でのスナップ

## &lt; ト ン ボ &gt;

トンボはヤゴと称される幼虫時代を水中で過ごし、種により止水域（池、沼）、流水域（河川）など生息環境を異にし、多様な水域環境を有する地域には種類数が多い傾向にある。昆虫類としては大型で、他の昆虫や小動物を餌とすることから、食物連鎖の上位を占める。このような性質から、人為による生物群集の攪乱には弱く、例えば家庭排水の流入などによる有機質汚染で姿を消す種も多い。また、平野部の低湿地の多くは農業用地や宅地として近年造成が進み、同水域を棲み場所とする種は全国的に減少している。このように、トンボ相の変化によりある程度水域の環境状態を計ることができることから、継続的な調査が望まれる。

長岡のトンボは遠山（1988）によると68種が知られるが、この中には分布上の貴重種や既に絶滅したと推定される種、逆に新たに侵入した種が含まれている。

貴重種、ムカシトンボは日本特産種であり、分類学的にはインド・ネパールに産するヒマラヤムカントンボと現生種としては2種だけで1亜目を形成する学術上の貴重種である。トンボやヤンマの類（不均翅亜目）と同様、がっちりとした体型であるにかかわらず、下翅のつけ根が絞られ（写真の矢印）2枚の脈相が基本的に同じであることからイトトンボの類（均翅亜目）と類似し、両亜目の特徴を兼ね備える。従って、現在のトンボを2分す

る両亜目の祖先型と考えられ古い種とされるが、上述2種がかけ離れた分布を示すことからも支持される。

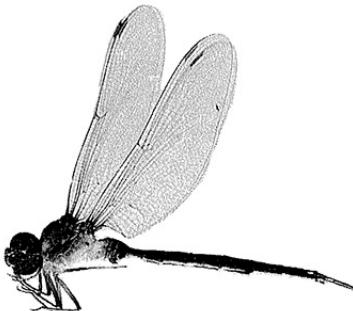
本種は第2回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）で取り上げられた10種の指標昆虫の1種であり、林の残された清冽な小流を生息場所とする。

長岡からは鈴木（1967）により初めて記録されたが、同氏の採集データは4月29日となっており、当地における出現時期としては異常に早いもので、その後、同期日に合わせた調査では追加することができなかった。1980年代に入って、5月中旬に出現することがわかり、東山各地で分布が確認された。成虫の出現期間が短い上に、年により発生期のずれが見られ、観察は容易でないが、いずれの産地でも個体数は少なくない。東山の自然を代表する種の1つであることから、生息地の確保を考慮する必要がある。

絶滅種、ベッコウトンボは悠久山公園の泉翠池で、1968年に採集されて以後記録が途絶え、絶滅と推定されている。アオハダトンボは大積町千本で1972年に採集されたが、河川改修工事以後確認されず、同産地は失われ、長岡から姿を消した。2種とも長岡の記録を最後に新潟県内からの報告は見られない。アオハダトンボと同属で生息環境が似ている近縁のハグロトンボは、1970年代には長岡では採集例がなかったが、80年代に入り見掛ける



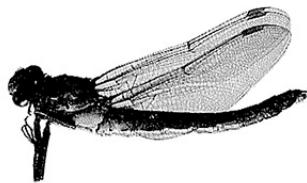
▲ムカシトンボの産地 (●)



▲カトリヤンマ（栖吉町産）

ようになり、近年では市街地でも採集され、勢力の回復が著しいが、アオハダトンボでも復活現象が見られるか興味ある問題である。ハグロトンボの場合7月中、下旬に発生のピークが見られるが、アオハダトンボの方が早く発生することから、6月下旬～7月上旬時の調査が望まれる。カトリヤンマも70年代以降の採集例がない。

侵入種。ハッショウトンボは柿町の放棄水田で、1985年に見つかった種である。浅い湿地を生息地とすることから、以前は産地の局限された種であったが、休耕田の



▲ホンサナエ（西山丘陵産）

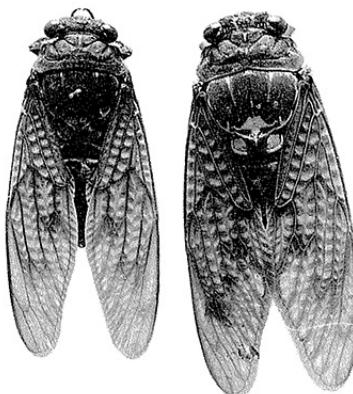
出現により、分布の拡大が見られ、産地も連続的になった。今のところ、西山丘陵の分布は知られないが、いつ、どの様に侵入するか、本種の移動能力を知る上で良い機会と言えよう。本州西南部以南に分布するハネビロトンボが柿町の養鯉池で採集されたが、やはり偶産で、その後の採集例はない。新潟県内におけるこの種の唯一の採集例であるが、南方系種の北上傾向が見られることから、飛翔能力の高い本種の追加記録は続くと考えられる。

## ＜ 七 ミ ＞

長岡のセミは8種が知られている（遠山、1989）が、1989年8月に市内在住の方から、未記録種であるクマゼミの鳴き声を土合町で聞いた旨私信をいただいた。しかし、残念ながら私は確認することができなかった。クマゼミの♀個体は生息地を離れて広範囲に飛散する例が知られており、また近年本種の北上傾向が太平洋側で顕著に認められ、隣県の富山には分布することから、いずれは長岡でもシャン・シャン・シャンと聞こえる本種の特徴的な鳴き声を聞くことができると思われる。今回は未

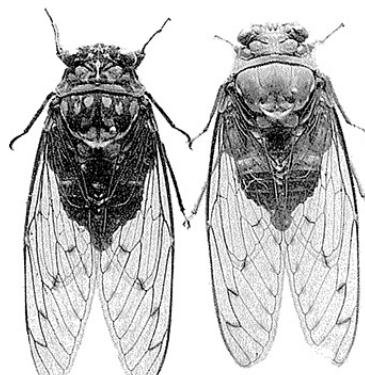
確認なので、一応分布記録には加えない。

長岡のセミについては色彩異常にてもかなり精査されており、特徴として黒色部分が退行して淡色化する異常型がエゾゼミ、アブラゼミ、ヒグラシに共通して見られることが指摘できる。エゾゼミについてはf.echigo,kobayashii,iwaoi,higumaiの各型を産し、アブラゼミではab.abidaが確認されている。しかし、ミンミンゼミでは黒色部の抜けたf.mikado（ミカドミンミン）が筑波山や甲府盆地で多産することが知られているが、今



▲アブラゼミ（長岡市産）

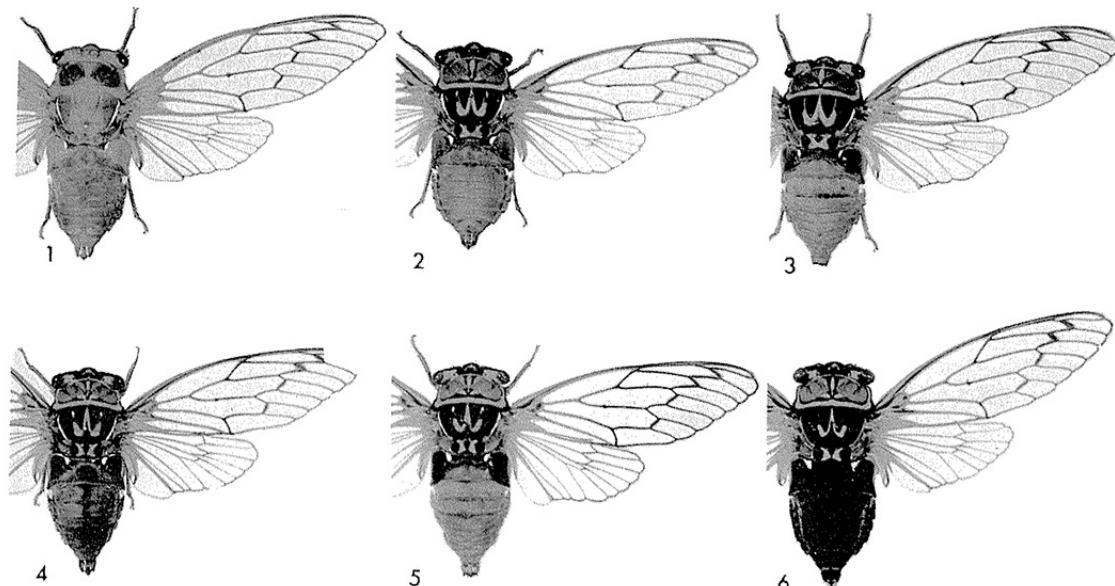
左：基本型、右：ab.abida



▲左：ミンミンゼミ（長岡市産）、  
右：ミカドミンミン（筑波山）

のところ長岡周辺を含む新潟県内からはこの型の採集例はない。むしろ、逆に他産地に比べ黒化の強い個体が多く見られ、上述のセミとは異なる変異傾向を示している。

今後周辺地域も含め、出現頻度など変異の概要を把握する必要があろう。



▲エゾゼミの色彩異常；1. f. *echigo*, 2. 3. 5. f. *higumai*, 4. f. *iwaoi*, 6. 基本型

### 〈 チ ョ ウ 〉

長岡のチョウは本稿で新たに記録する種も含めると、85種が知られる。この中には、近年採集例がない種や、台風などにより運ばれたいわゆる“迷蝶”が含まれている。

85種と言う種数は、新潟県内産145種の58.6%を占めるが、分布を欠く種の多くは山地性種であり、長岡のチョウ相の特徴となっている。標高的に高山蝶の分布は望めないが、ブナ帯に分布の中心がある森林性種が少なく、東山に残っているブナ林を考慮すると、伐採などの人為活動により森林性種が衰退したのか、あるいは元来分布を欠くのか、生物地理学上興味ある課題と言えよう。例えば、ブナを食樹とするフジミドリンシジミは県央山地帶に希薄ながら広く分布し、最近板尾市守門岳の低標高地でも分布が確認されたが、この種の長岡での分布の有無は1つの指針を与えると考えられる。旧真木集落付近に残るブナ林での調査が必要であろう。

新たに記録される種、ウラクロシジミは西山ニュータウンで行った「昆虫相を調べる会」に参加された会員片山和久氏（長岡技術科学大学修士課程、当時）により採集された（1♀、19. VI. 1988）。本種はマルバマンサクを食樹の1つとすることから、同樹の多い東山、森立

峰付近での探索が続いているが、意外にも標高50m程の西山丘陵で発見された。本種は県央の山地帯では普遍的に見られるが、いずれの地でも個体数は少ない。ジョウザンミドリシジミは柿町南蛮山で採集された旨、新里達也氏（東京都）から私信をいただいた（1♀、VII. 1989、林聰彦採集）。私はこの種を確認していないが、本種の属するオオミドリシジミ属としては県央部で最も勢力の強い種であり、隣接する板尾市でも多産地があることから採録した。從来本属としてはオオミドリシジミ1種だけが長岡では知られるに過ぎなかったが、本種が採集されたことにより、本種同様県央山地帯に広く分布するエゾミドリシジミに関する調査が必要である。ウラギンシジミは野神護氏（北越銀行）により栖吉町で採集された（1♂、15. IX. 1989）。この種は暖地性種であり、太平洋戦争以前での県内における採集例は極めて少ないものであったが、海岸沿いに顕著な北上を示し、現在では県北部を含め沿岸地域に広く分布を見る。長岡からは本稿が初記録となるが、栖吉町では他にも採集されており（根立氏、私信）、少なくとも一時的には定着したと推定される。海岸線に近い西山丘陵ではなく、東山で採集

## 長岡のチョウ

和 名	備 考	和 名	備 考
1) ギフチョウ	普通	44) ミドリヒョウモン	
2) ウスバシロチョウ	信濃川にも分布	45) ラガキンヒョウモン	
3) ジャコウアゲハ	信濃川だけ	46) ツマグロヒョウモン	迷蝶(小木ノ城)
4) アオスジアゲハ	東山では少ない	47) アサマイチモンジ	
5) キアゲハ		48) イチモンジ	
6) アゲハ		49) コミスジ	
7) モンキアゲハ	東山では悠久山だけ	50) オオミスジ	近年の採集例はない
8) クロアゲハ		51) サカハチチョウ	西山では少ない
9) オナガアゲハ		52) キタテハ	
10) カラスアゲハ		53) シータテハ	東山に稀産
11) ミヤマカラスアゲハ		54) エルタテハ	別記
12) モンキチョウ		55) ヒオドシチョウ	
13) キチョウ	春季には少ない	56) ルリタテハ	
14) スジボソヤマキチョウ	東山では少ない	57) クジャクチョウ	東山に稀産
15) エゾスジグロシロチョウ		58) ヒメアカタテハ	
16) スジグロシロチョウ		59) アカタテハ	
17) モンシロチョウ		60) メスアカムラサキ	迷蝶(小木ノ城)
18) ツマキチョウ		61) スミナガシ	東山では1例だけ
19) ムモンアカシジミ	森立峠周辺だけ	62) コムラサキ	
20) ウラクロシジミ	別記	63) ゴマダラチョウ	
21) アカシジミ		64) オオムラサキ	東山では少ない
22) ウラナミアカシジミ	前種より多い	65) ヒメウラナミジャノメ	
23) ミズイロオナガシジミ		66) ジャノメチョウ	信濃川だけ
24) ミドリシジミ	乙吉町に多産	67) ヒメキマダラヒカゲ	近年の採集例はない
25) オオミドリシジミ		68) オオヒカゲ	近年増加傾向を示す
26) ジョウザンミドリシジミ	別記	69) クロヒカゲ	
27) トラフシジミ	夏型は少ない	70) ヤマキマダラヒカゲ	
28) コツバメ		71) サトキマダラヒカゲ	
29) ベニシジミ		72) ヒメジャノメ	
30) ゴイシジミ		73) コジャノメ	
31) クロシジミ	東山だけに稀産	74) ミヤマセセリ	
32) ウラナミシジミ	迷蝶	75) ダイミョウセセリ	
33) ヤマトシジミ		76) キバネセセリ	東山だけに稀産
34) ルリシジミ		77) アオバセセリ	東山では少ない
35) ツバメシジミ	近年の採集例はない	78) ギンイチモンジセセリ	
36) ミヤマシジミ	別記	79) コチャバネセセリ	
37) ウラギンシジミ		80) コキマダラセセリ	
38) テングチョウ	東山だけに分布	81) キマダラセセリ	
39) アサギマダラ	迷蝶(小木ノ城)	82) オオチャバネセセリ	
40) ウラギンスジヒョウモン	近年の採集例はない	83) ミヤマチャバネセセリ	東山に稀産
41) オオウラギンスジヒョウモン	普通	84) チャバネセセリ	悠久山の1例だけ
42) メスグロヒョウモン		85) イチモンジセセリ	
43) クモガタヒョウモン	東山では少ない		

されたことは注目されよう。

今回記録に用いたウラクロシジミとウラギンシジミは、採集者から博物館にご寄贈いただいた。両氏に厚くお礼申し上げる。

近年採集例のない種、長岡のチョウを記録した文献は多数あり、本稿の作成にも引用させていただいたが、古い記録としては中村正雄(1925)と荻野誠作(1953)がある。エルタテハは中村氏が栖吉から記録したものであるが、その後長岡での採集例は知られない。本種は高原などの高標高地に分布し、一見同属のヒオドシチョウに似ることから、この記録は疑問視されていた。しかし、最近栃尾市の低標高地における越冬個体の採集例があり、本種が越冬に際し低標高地へ移動する習性が認められることからも、越冬時には長岡でも観察される可能性が否定できなくなった。今後、同時期での探索に期待したい。なお、やはり越冬時移動することが知られる近縁のクジャクチョウについては、夏季極めて稀に東山で観察されるに過ぎないが、市街地で越冬個体の採集例がある(1♂. 30. III. 1966, 川崎、山屋茂人採集)。

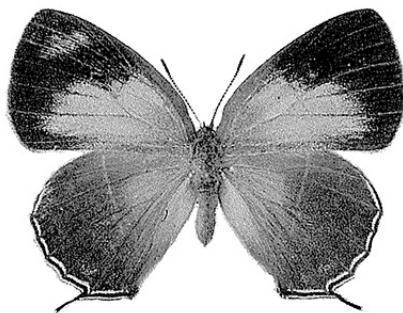
オオミスジ、ヒメキマダラヒカゲ、ミヤマシジミも荻野氏以後の報告はなく、既に40年近く採集例がない。この中でヒメキマダラヒカゲは県央山地帯に多産する種であるが、太平洋戦争前後に行われた強度の伐採により絶

滅したものとすれば、人為による自然への攪乱の度合を計る良い指標種と言えよう。

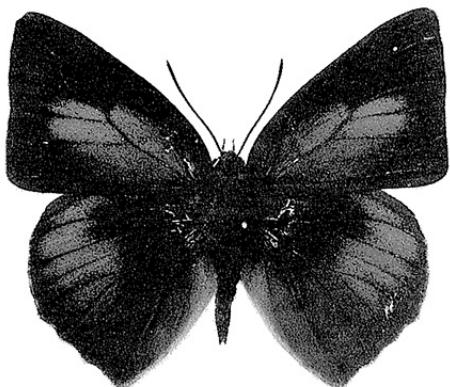
偶産したチョウ、アサギマダラ・ツマグロヒョウモン・メスアカムラサキの3種は小木ノ城で得られたが、これらは台風などにより運び込まれた迷蝶と考えられる。同地では年次を異にするが、いずれの種も複数採集されていることから、迷蝶の飛来ルートに当たると考えられる。小木ノ城は海岸寄りの小高い丘であり、山頂占有行動を示すギフチョウ、キアゲハが多数見られ、このような地形上の特徴により迷蝶の来る頻度が高いのであろう。同様な例は水田害虫を含むウンカ、ヨコバイでも知られ、海上を飛來した集団が到達する確率の高い地点が知られる。

チャバネセセリも飛翔力に優れた南方種であり、県内での採集例が少ない種であるが、悠久山で1例の採集記録がある。地味なチョウであることから、近縁種を含めた積極的な調査が必要であろう。

分布が期待される種。昨年、見附市教育委員会から、「見附の昆虫・その3・チョウ編」が刊行され、長岡から分布記録のないミスジチョウ、ウラミスジシジミが記録された。前種はカエデを、後種はコナラなどのナラ属を食樹とするもので、長岡にも普通に見られる樹であることから、長岡に分布する可能性は極めて高いものと思われる。



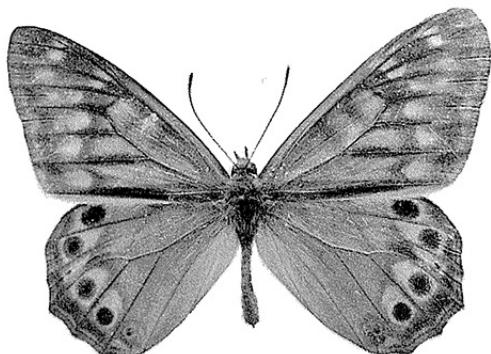
▲ウラクロシジミ (長岡市産)



▲ウラギンシジミ (長岡市産)



▲エルタテハ (南魚沼郡湯沢町産)



▲ヒメキマダラヒカゲ (南魚沼郡湯沢町産)

## 〈甲虫類〉

昆虫の中でも種数に富む一群であることから、長岡の甲虫相は未だ明らかでないが、オサムシ科とカミキリムシ科についてはまとめた報告がある。カミキリムシ科は山屋・片桐(1985)が報じたが、県内各地との比較から、東山のカミキリムシ相はブナ帯下部に形成されるものを基調とし、現在の所産種数の少なさは人為によるものと推論されている。

本稿では長岡から知られる甲虫類のうち、分布上注目すべき種を取り上げ、解説する。

北限もしくはそれに準ずる種、北限産地として、アオマダラタマムシが記録された。大型の美麗種で、クロマダラタマムシと2種で*Nipponobuprestis*属を形成する日本特産種であるが、栖吉町城山で行われた「昆虫相を調べる会」に参加した岩渕友裕君(東小千谷小学校3年:当時)によって採集された。本種は個体数の少ないものとされ、既知産地も限られるが、サクラ類を食樹とすることが知られており、今後の追加例の指標となる。城山ではヤスマツケシタマムシも採集されている(青木章典、新潟大学附属長岡中学1年:当時)が、本種も西南日本に分布の中心があり、新潟県が北限とされるものである。ヒメカンショコガネは信濃川河川敷で片桐聰君(大島小学校3年:当時)により採集されたが、本種の属する*Apogonia*属は東南アジアに広く分布し、属自体の東北限にあたる貴重なものである。同様に信濃川河川敷に定着しているヒラタクワガタも、種*titanus*を広く考えると、インド、マレー、ボルネオ、フィリピンなど東洋熱帯に広大な分布圏を有する本種の東北限産地に準ずる。甲虫類ではないが南方系種であるジャコウアゲハも信濃川に限定された分布を示すことから、信濃川は暖地性種の内陸への通路と言えよう。

西限に準ずる種、長岡のカミキリをまとめた際に鋸山からクワサビカミキリを記録したが、これはその後記載された同属のタコサビカミキリであることが判明した。

一見サビカミキリ属に似るが、上翅基部寄りに隆起部を具えないことから、*Mesosella*属は区別され、従来1属1種であることでクワサビカミキリと同定されたものである。タコサビカミキリは岩手県早池峰山から得られた個体を模式標本として記載され、本州東北地方を分布域とし、中部地方では南魚沼郡湯沢町八木沢だけが知られるに過ぎない。湯沢町では三国峠、元橋などの高標高地で典型的なクワサビカミキリが採集され、標高の低い八木沢でタコサビカミキリとクワサビカミキリの分布が確認されている(山屋、1983)。今回の記録と併せると県央以北の低~中山帶に本種の分布する可能性が高い。

稀産種、アカマダラセンチコガネは岩手県以南の本州、九州、および亜種を異にするものの南西諸島、台湾に分布するが、生態が未知で確実な採集方法がなく、既知産地の少ない種である。長岡では真木集落跡地、市営スキー場で採集され、貴重な分布記録となっている。8~9月に得られるが多く、いずれの個体も新鮮であることから、同時期から発生し、成虫で冬を越すものと推定される。マルコブスジコガネは悠久山のサギ類のコロニーに多産するが、本種を確実に観察できる唯一の産地として貴重なものである。なお、この種の学名としては、現在*Trox mitis* BALTHASARが使われており、最近まで本種に当てられていた*T.setifer*はアイヌコブスジコガネに用いられる。ルリカミキリは長岡では百間堤と乙吉町から記録があるが、県内での他産地は全く知られていない。オオルリハムシは信濃川河川敷で1960年代にはエゾシロネに多産していたが、近年の採集例は知られない。この種はハムシ科としては大型で、色彩に地理的変異が見られ、既知産地数の少ない貴重なものである。オサムシ科では、西山丘陵だけから知っていたクロカタビロオサムシが東山から採集された(1♀、10.VII.1989、八方台)。他のオサムシと異なり、腐肉トラップや冬季採集では採集しにくい種で、新潟県内の産地も少ない。



▲アオマダラタマムシ



▲クロカタビロオサムシ



▲アカネトラカミキリ (長岡初記録)

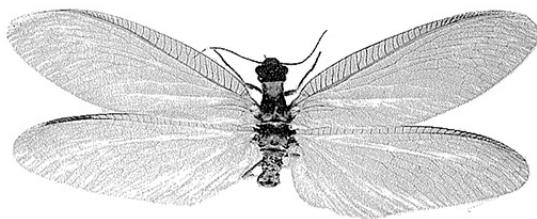


▲タコサビカミキリ

### 〈博物館に問合わせの多い種〉

博物館に問合わせのため持ち込まれる昆虫は、夏休みの標本作成などを除くと、2つのグループに大別できる。1つは、室内衛生昆虫や園芸植物を食害する昆虫でいわゆる害虫に属し、コナチャタテの類、ヤマトシミ、ノコギリホソカタムシ、ヤマトシロアリ、マツカレハなどが

比較的頻度が高い。他のタイプとしては、形態の変わったものや冬季に出現するなど一般的な昆虫の概念からかけ離れた種類である。ここでは、特に問合わせの多い次の3種について簡単な解説を行う。

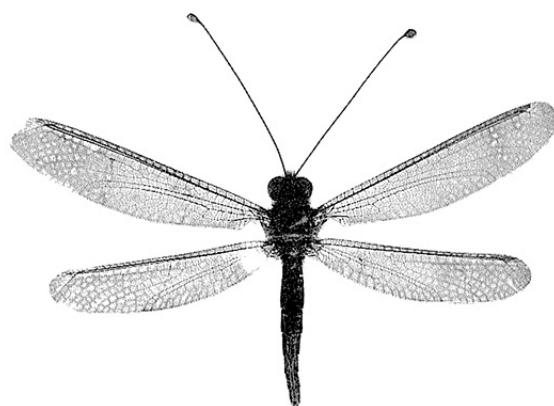


オオツノトンボ ▶

一見トンボの類に似ているが、アゲハチョウに似た先端が丸まる長い触角を具え比較的活発に歩くことから、変わったトンボとして博物館に持ち込まれる機会が多い。昆虫の系統からはトンボとは大きく異なり、蛹の時期があることから、より高等な部類に属し、幼虫時代にアリジゴクと呼ばれるウスバカゲロウに近縁である。長岡ではツノトンボの仲間は1種だけであるが、県内には他に2種産する。本種は桜沢(1988)が三条市周辺で普通に産するとしたように長岡でも観察できるが、他の2種は県内では稀産種に属する。キバネツノトンボとは翅の色が異なることで区別は容易だが、ツノトンボとは区別が難しく、複眼の構造を調べる必要がある。草地に隣接した灯火に夏季飛来する。

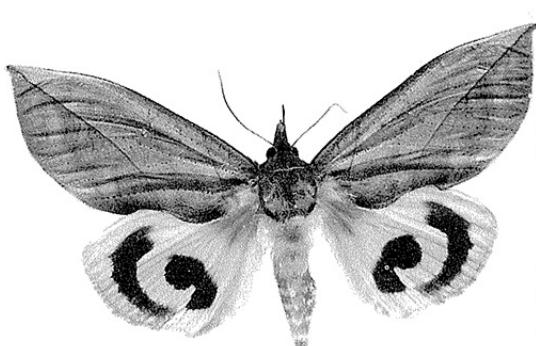
#### ◀ヘビトンボ

幼虫は水の中で過ごし、老熟したものでは体長5cmに達し、水生昆虫としては最大型となる。蛹化の際陸上に上がり、成虫は6~8月に出現し、正の走光性が強いことから、灯火に飛来する。幼虫、成虫ともに他の昆虫を捕食するため、発達した大アゴを有し、把むと噛みつく。良く似た2種が見られるが、本種は黄色味が全体に強く区別できる。



◀アケビコノハ

ガの仲間としては、冬季室内に侵入するフクラスズメとともに本種の問合せが多い。前翅が枯葉と良く似ていること、下翅の色彩が黄色地に黒帯を有しはでなこと、そして昆虫類の少ない晩秋に出現する大型種であることから、人目に付くものと思われる。7~8月にも成虫は出現するが、この季節の問合せは少なく、それが発生数の少なさによるのか、興味あることである。近縁のヒメアケビコノハとともにモモなどの果実に穴を開け、吸汁する農業上の害虫とされる。幼虫の色彩も黄白色の環紋に眼状紋を具える独特なもので、和名のようにミツバアケビを食草とする。



### 〈おわりに〉

大型種を中心に、分布上の貴重種を解説した。昆虫は動物界の中でも最も種数が多い一群で、小型種が多くを占めることから資料収集が難しく、調査が比較的進んでいる長岡でも未だ概要は明らかでない段階にある。存在

の知られぬままに、何気ない人の活動により、永久に失われていく種の存在が考えられ、自然を記述することの重要さが言われる由縁である。観察ノートを手に、生き物の生活を記録しましょう。思わぬ成果に出会えます。

## 平成元年度事業報告

### 資料収集・調査

#### 〔地学研究室〕

- 地質調査 中蒲原郡小須戸町：8月
- 研究協議 新潟市：2月  
東京都：3月

#### 〔植物研究室〕

- 植物分布調査 南魚沼郡六日町：5月、6月（2回）  
7月、8月  
南魚沼郡湯沢町：8月  
北蒲原郡中条町：3月

- 研究協議 新潟市：3月

#### 〔昆虫研究室〕

- 昆虫分布調査 佐渡郡金井町：4月  
糸魚川：4月  
栃尾市：5月  
南魚沼郡湯沢町：6月（2回）、7月  
岩船郡粟島浦村：3月

- 研究協議 北蒲原郡黒川村：12月

#### 〔動物研究室〕

- 鳥類分布調査 南蒲原郡下田村：5月、6月  
岩船郡粟島浦村：3月

#### 〔歴史民俗研究室〕

- 民俗調査 三島郡越路町：5月
- 古書籍調査 東京都：3月

#### 〔考古研究室〕

- 遺跡分布調査 中魚沼郡津南町：7月  
西蒲原郡巻町：7月

- 研究協議 東京都：3月

### 学会・研修会・協議会

- 越佐昆虫同好会研究発表会 4月2日、中魚沼郡中里村（参加：山屋学芸員）
- 平成元年度新潟県博物館協議会総会 4月18日、新潟市（参加：鈴木館長）
- 新潟県民俗学会常任理事会 4月22日、新潟市（参加：鈴木館長）
- 第31回北信越博物館協議会総会及び研究協議会 6月27・28日、中魚沼郡津南町（参加：鈴木館長、渡辺主査、加藤学芸員）
- (財)日本博物館協会公立館長会議 6月29日、東京都（参加：鈴木館長）
- 新潟県考古学会大会 7月9日、新潟市（参加：駒形主査）
- 1989年度鳥学会大会 9月9・10日、船橋市（参加：渡辺主査）

- 新潟県博物館協議会学芸員等職員研修会 9月13・14日、中頸城郡三和村（参加：今井係長、駒形主査）
- 新潟県民俗学会有志採訪及び共同採訪 9月15・16日、柏崎市及び刈羽郡小国町（参加：鈴木館長）
- 日本民俗学会第41回年会 9月30日・10月1日、東京都（参加：鈴木館長）
- 日本考古学協会1989年度大会 10月7・8日、富山市（参加：駒形主査）
- 日本鞠翫目学会第2回大会 11月19日、東京都（参加：山屋学芸員）
- 「土偶とその情報」研究会 11月24・25日、福島県河沼郡柳津町（参加：駒形主査）
- 生態学講座 3月15日、東京都（参加：西山館長補佐）

### 普及活動

- 地層をしらべる会 5月28日、柿川上流及び科学博物館学習室、参加者4人。
- 春の植物を観察する会 5月14日、栖吉町周辺、講師：植物研究家 坪谷富男先生、参加者31人。
- 初夏の植物を観察する会 7月2日、東山ファミリーランド周辺、参加者27人。
- 親子の夏の植物観察会 7月23日、成願寺町周辺、参加者44人。
- キノコをしらべる会 10月7日、東山ファミリーランド周辺、講師：長岡技術科学大学助教授 宮内信之助先生、参加者37人。
- 雪国植物の越冬を観察する会 11月23日、長岡ニュータウン周辺、参加者11人。3月25日、長岡ニュータウン周辺、参加者4人。
- 昆虫相をしらべる会 調査地：大積赤池周辺 6月18日、講師：新潟県農業試験場 小嶋昭雄先生、参加者12人。8月8日、講師：昆虫研究家 樋熊清治先生、参加者17人。
- 昆虫標本づくり教室 7月30・31日、悠久山周辺及び中央公民館302教室、講師：昆虫研究家 樋熊清治先生、参加者53人。
- 野鳥相をしらべる会 調査地：長岡ニュータウン周辺 4月23日、参加者25人。5月28日、参加者14人。6月25日、参加者20人。7月23日、参加者20人。8月27日、参加者13人。9月24日、参加者24人。10月22日、参加者10人。11月26日、参加者13人。
- 野鳥集会と探鳥会

- 5月20・21日、はかま温泉及びその周辺、参加者37人。

  - ・大河津分水探鳥会  
10月29日、大河津分水周辺、参加者17人。
  - ・悠久山探鳥会と野鳥集会  
11月19日、悠久山～百間堤及び栖吉中学校、参加者24人。
  - ・冬鳥さよなら探鳥会  
3月18日、信濃川（長生橋上流）、参加者22人。
  - ・縄文土器をつくる会  
5月14日（造形）・6月4日（野焼き）、深才公民館及び藤橋遺跡自由広場(1)、講師：陶芸作家 今千春先生、考古学研究家 磯部保衛先生、参加者28人。
  - ・縄文時代の石器をつくる会  
8月9日、藤橋遺跡自由広場(1)、講師：考古学研究家 磯部保衛先生、参加者31人。
  - ・縄文食（ドングリダンゴ）をつくる会  
11月3日、科学博物館学習室、参加者5人。
  - ・植物標本の名前をしらべる会  
8月28日、科学博物館学習室、参加者49人。
  - ・昆虫標本の名前をしらべる会  
8月29日、科学博物館学習室、参加者12人。
  - ・第38回生物標本展示会・第31回自然科学写真展示会  
10月3日～8日、会場：中央公民館大ホール、出品者数285人、出品点数8,673点、入場者数延869人。
  - ・第26回県内小・中・高校生生物研究発表会  
10月8日、会場：中央公民館401教室、発表：小学生の部10題、高校生の部2題、入場者数延68人。
  - ・科学博物館講演会  
11月18日、会場：中央公民館401教室、演題：信濃川がつくった長岡の大地—平野の地下をさぐるー、講師：県立小千谷高等学校教諭 渡辺文雄先生。地学研究室の報告：磁石が語る長岡東山のおいたち、当館学芸員 加藤正明。入場者38人。

・藤橋遺跡における堀立柱建物の調査 駒形敏朗・小熊博史

・秋山景山自筆の『長岡領風俗問答』 鈴木昭英

### 総合博物館建設のための事業

  - ・長岡市立総合博物館（仮称）基本構想検討委員会の設置
    - ・委員名簿（敬称略、ブロックごと50音順）

	氏 名	職 名
学識経験者	伊藤 文 吉	新潟県博物館協議会会長
	岩井 宏 實	国立歴史民俗博物館教授
	○杉山 二 郎	長岡技術科学大学教授
	高鳥 一 男	県自然環境保全審議会副会長
	毛利 正 夫	日本博物館協会専務理事
団体または機関の代表	北原 克 二	長岡市社会教育委員長
	藤田 均	長岡市立南中学校校長
	○横山 陽 輔	長岡商工会議所常議員
	吉田 勉	長岡青年会議所副理事長
	渡邊 精 也	中越高等学校校長

◎会長、○副会長

  - ・委員会の開催

第1回	8月10・11日	長岡市役所第二応接室・長岡市教育センター中研修室
第2回	11月15日	長岡市役所第二応接室
第3回	2月27日	長岡市教育センター中研修室
・基本構想の答申		平成2年3月31日

### 平成元年度月別入館者数

月 別	個 人		団 体		資料照会		計		
	大人	子供	団体数	大人	団体数	子供			
元. 4	324	228	1	45	16	1,557	20	2	2,176
5	394	261	3	87	31	2,161	23	-	2,926

出版物

- 館報（N K H）
    - ・ 56号 生物研究発表会特集 700部
    - ・ 57号 特集・長岡の昆虫 700部
    - 博物館研究報告 第25号 500部
    - ・ 新潟県東山丘陵の地質（その1）  
新潟平野東縁団体研究グループ
    - ・ 信濃川の河辺植物（第10報）支流・魚野川の河辺(2)  
西山邦夫・荒井キミ
    - ・ 新潟県のコガネムシ相 山屋茂人
    - ・ カルガモの春期群の行動と水田への飛来について

渡辺 央

	氏名	職名
学識経験者	伊藤文吉	新潟県博物館協議会会长
	岩井宏實	国立歴史民俗博物館教授
	○杉山二郎	長岡技術科学大学教授
	高鳥一男	県自然環境保全審議会副会長
	毛利正夫	日本博物館協会専務理事
	北原克二	長岡市社会教育委員長
団体または機関の代表	藤田均	長岡市立南中学校校長
	○横山陽輔	長岡商工会議所常議員
	吉田勉	長岡青年会議所副理事長
	渡邊精也	中越高等学校校長

◎会長、◎副会長

- |              |                              |
|--------------|------------------------------|
| ・委員会の開催      |                              |
| 第1回 8月10・11日 | 長岡市役所第二応接室・長岡<br>市教育センター中研修室 |
| 第2回 11月15日   | 長岡市役所第二応接室                   |
| 第3回 2月27日    | 長岡市教育センター中研修室                |
| ・基本構想の答申     | 平成2年3月31日                    |

平成元年度月別入館者数

月別	個人		団体			資料照会		計	
	大人	子供	団体数	大人	団体数	子供	大人	子供	
元. 4	324	228	1	45	16	1,557	20	2	2,176
5	394	261	3	87	31	2,161	23	—	2,926
6	247	130	1	19	1	14	29	1	440
7	298	219	3	92	3	461	24	3	1,097
8	593	449	5	110	2	155	33	27	1,367
9	326	167	1	100	1	201	33	4	831
10	1,006	776	3	66	2	72	98	1	2,019
11	262	115	2	52	—	—	54	—	483
12	137	78	1	26	—	—	18	—	259
2. 1	124	58	—	—	—	—	8	—	190
2	162	71	2	26	—	—	4	—	263
3	229	134	2	61	—	—	9	1	434
計	4,102	2,686	24	684	56	4,621	353	39	12,485

**主な資料寄贈（敬称略）**

- 地学資料  
軟体動物化石 26点 柏崎市松波2 安井 賢
- 昆虫資料  
アカハラゴマダラヒトリとキハラゴマダラヒトリの  
雑交標本 1点 柏崎市北園町 萩野誠作  
ウスイロコノマチョウ (佐渡島産) 1点  
群馬県 阿部勝次

**職員の移動**

- 昇任 (平成元年4月1日付)  
駒形敏朗 (主査)

- 転入 (平成元年4月1日付)  
相沢 仁 (管理員) 表町小学校より  
転出 (平成元年4月1日付)  
松崎久子 (管理員) 川崎小学校へ  
昇任 (平成元年10月1日付)  
今井鎮雄 (副主幹・庶務係長事務取扱)  
昇任 (平成2年4月1日付・3月28日内示)  
西山邦夫 (主幹・館長補佐事務取扱)  
転入 (平成2年4月1日付・3月28日内示)  
山岸与志雄 (庶務係長) 市民税課より  
転出 (平成2年4月1日付・3月28日内示)  
今井鎮雄 (副主幹・庶務係長事務取扱) 中央図書  
館へ

N K H (長岡市立科学博物館報) No.57

平成2年3月31日発行

---

編集・発行 長岡市立科学博物館 (長岡市柳原町2番地1)  
印 刷 所 (有)めぐみ工房 (長岡市千場1丁目2-17)